

戦争では何も解決しない・・・

当院の松寄安容看護師長が、紛争が続くパキスタン北部近郊の都市“ペシャワール”の戦傷外科病院で3月から半年間、負傷した民間人や兵士の治療にあたってきました。人間の生命と尊厳を守るために活動する『赤十字』がなぜ誕生したのか・・・松寄師長が戦地という極限状態において感じた、人間が持つ普遍的な“他者を思う心”にその答えがある気がします。

『戦地での活動は今回が初めてでしたが、紛争地の現状を痛感しました。戦争では何も解決しません。』

現地では政府軍と武装勢力の戦闘が激化しています。銃声が響き、戦闘機が空を飛び、自爆テロによってコンクリート片が降ってくる、そんな環境でした。

宗教や民族が入り乱れる紛争地での活動は困難の連続でした。運ばれてくる負傷者の傷はひどく、足を切断しなければならないことも多かったのですが、イスラムの教えで、彼らにとっては「五体満足でいることが絶対」・・・説得しても「聖戦で命を落とせば、もっと良い天国に行ける」と治療を拒み、亡くなってしまう兵士もいました。また、肌を見せることはタブーで、手当をしようとする、大げかにも関わらず診察させてくれないこともありました。宗教への配慮として、宗派によってベッドの配置を変えたり、食事にも気を遣いました。

テントでできた病院には、兵士だけでなく民間人も多く運ばれて来ました。空爆によって水道や電気が止まっているため、綺麗な水などの資源を求めて山間部に入ると、そこで地雷やトラップの犠牲になってしまうのです。資源をめぐる部族間の争いも頻発しています。

苦労や戸惑いはとても多かったです。しかし、最初は治療を拒んだ患者も何日かすると「ヤスエ、ヤスエ。今日は診てくれないのかい」と慕うように話しかけてくれました。「俺はアメリカ兵を殺したんだ」と叫び、リハビリを拒否した少年も、死んだと思っていた父親と再会すると、将来に向けて前向きになり、リハビリを始めるようになりました。家族を大切にするのはみんな同じ。ただ幸せに暮らしたいはずなのに、それができません。

他国のことであっても無関心は良くない。人はみんな一緒です。紛争という極限状態であっても、人と人とのつながりがやりがいでした。

『今後も海外救援活動に従事するつもりでいます。助産師の資格を生かして、紛争地で母子保健を充実させたいとも考えています。』

この言葉のとおり、松寄看護師長は、再び海外へ旅立ちます。

今度は、2月から約2か月間、ハイチ共和国において、コレラに苦しむ人々を救援します。

※ ペシャワール戦傷外科病院

赤十字国際委員会が紛争犠牲者を救援するために開設。テントの中に約120床あり、約220人の医療従事者が治療にあたる。日本赤十字社からは、松寄看護師を含め、6人を派遣している。現地の医療技術向上も病院設置目的のひとつ。

画像 by : Army.mil